

発話の丁寧さに対する 語彙的要因と韻律的要因の寄与

前川 喜久雄・吉岡 泰夫

キーワード：丁寧さ、イントネーション、終助詞、熊本方言、一対比較法

要 旨

発話の丁寧さを決定する要因には、語彙的・文法的な要因と韻律的な要因とが存在する。このうち韻律的な要因の寄与および両要因間の関係についての研究は、従来ほとんどおこなわれてきていない。この研究では両要因が発話の丁寧さの判定にどのように寄与するかを実験的な手法をもちいて解析した。熊本方言の疑問詞疑問文を対象とし、語彙的要因としては丁寧さの異なる3種の終助詞を、韻律的要因としては6種類のイントネーションをとりあげた。大学生および中年層の二世帯を被験者群として、一対比較法により18種類の刺激音の丁寧さを測定した。測定の結果、韻律的要因が語彙的要因とは独立に、同程度の寄与をおこなっていることが判明した。従来の待遇表現研究の限界を示唆する結果である。

1 はじめに

音声によって伝達される情報には言語情報の他にパラ言語情報と総称されるものがある。発話意図、強調の所在、聴き手への待遇、種々の感情、話者の身体性などに関する情報である。パラ言語情報は文字言語ではほぼ欠落してしまうが、音声言語では韻律を主要な経路として伝達され、コミュニケーションに重要な役割を果たしている(藤崎1994;前川1996a)。例えば「ソーデスカ」というテキストは分節音の持続時間、アクセント核の移動や消去を含む発話全体のピッチ形状、母音の音質などの音声学的手段を利用して、「あいづち」「疑い」「感心」等、さまざまなパラ言語的意味を伝達していることが報告されている(前川1996b)。今回の研究ではパラ言語情報のひとつとして発話の丁寧さをとりあげる。

2 問題のありか

発話に含まれる種々のパラ言語情報のうち「丁寧さ」の表出には、実質語の選定、動詞・助動詞類の文法的形態、いわゆる語順など、言語に依存して定まる様々な文法的手段(例えばBrown & Levinson 1978)と、これもまた相当程度言語依存と考えられる様々な韻律的手段とが共に利用されている。その意味で「丁寧さ」は言語情報とパラ言語情報の境界に位置する情報とみなすことができる。

日本語のうち東京語では文法的手段として実質語の選択と述語の文法的形態が大きな役

割を果たしており、例えば～ダ、～デス、～デゴザイマスのように範疇化されたパラディグマティックな対立が観察される。この方面に関する研究（待遇表現研究）は、語用論・社会言語学などで従来から盛んにおこなわれてきている。

一方、韻律が丁寧さの表出に関与していることは直観的に明らかであるが、実証的な研究はあまりおこなわれていない。そのなかで洪(1993)は同一テキストを様々な丁寧さの水準で発話しわけたデータを生成と知覚の両面から検討し、丁寧な発話では持続時間が延長しピッチが高まる等の傾向を見出している。

このように丁寧さの音響的関連量を見出す研究も大切であるが、丁寧さの研究に関しては、語彙ないし文法によって表出される丁寧さと韻律によって表出される丁寧さとの関係を解明することが根本的に重要である。実際、洪氏も上記論文中で「いくら丁寧度の高い言語形式を用いても、発話の仕方によって伝えられる丁寧さはかなり違うことを物語っている」(p.28)と指摘しているのだが、残念なことにこの問題自体には検討がおよんでいない。

仮想的な例を用いて問題を明らかにしておこう。語彙的ないし文法的な要因としてA, B, Cの三要素、韻律的な要因としてa, b, cの三要素があるとする。また両要因をそれぞれ独立に分析すると、要素間の丁寧さの序列はそれぞれ $A > B > C$, $a > b > c$ であるとする。

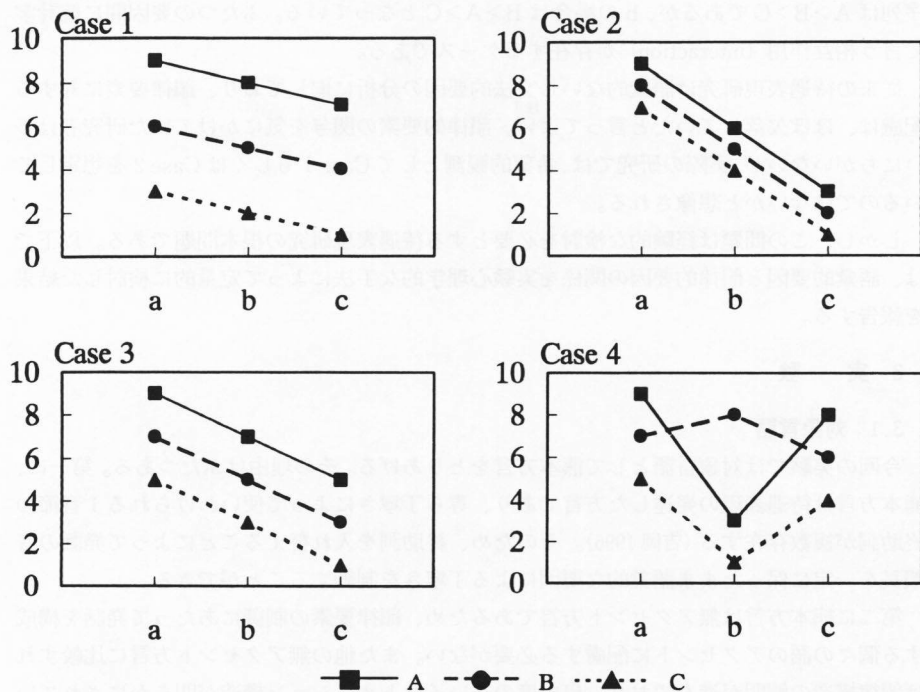


図1 文法的要因と韻律的要因間の仮想的関係4種

縦軸の数量は丁寧さの水準、a, b, cは韻律的要因、A, B, Cは文法的要因。

(14) 発話の丁寧さに対する語彙的要因と韻律的要因の寄与

ふたつの要因を組み合わせると Aa, Ab, Ac など9種の発話が得られる。これらの発話の丁寧さを何らかの方法で測定できるものとして、発話の丁寧さにどのような序列が生じるかを考えよう。様々な結果が予想できるが、重要なものを図1に示した。図の縦軸が丁寧さの水準を示している。

まず、もっとも単純なケースとして、どちらかの要因が他方を圧倒してしまう関係が考えられる。もし語彙的要因が韻律的要因を圧倒してしまうとすれば Case 1 のような結果が得られるだろう。語彙要素 A はどのような韻律と組み合わせられても、常に語彙要素 B よりも上位にある。B と C の関係も同様である。反対に韻律的要因が語彙的要因を圧倒するとすれば Case 2 のようになる。

Case 3 は Case 1 に似ているが、語彙的要因が韻律的要因を圧倒してはいない点で異なっている。語彙的に高い丁寧さをもつ要素であっても、組み合わせられる韻律的要素の丁寧さが低ければ(Ac)、語彙的丁寧さの低い要素と韻律的丁寧さの高い要素の組み合わせ(Ba)よりも丁寧さが低くなっている。

以上三つのケースに関するかぎり、要因の一方を固定してしまえば他方の要因要素間の序列は一定である。これに対して Case 4 では、組み合わせられる韻律的要素の如何によって語彙的要素内部の序列に異同が生じている。例えば韻律的要素が a の場合、語彙的要素の序列は A>B>C であるが、b の場合は B>A>C となっている。ふたつの要因間に統計学で言う相互作用 (interaction) が存在するケースである。

従来の待遇表現研究は語彙的ないし文法的要因^{注1}の分析に偏しており、韻律要素に対する配慮は、ほぼ欠落していたと言ってよい。韻律的要素の関与を気にかけていた研究者は多いにちがいないが、実際の研究では、希望的観測として Case 1 もしくは Case 2 を想定しているのではないかと想像される。

しかし、この問題は経験的な検討を必要とする待遇表現研究の根本問題である。以下では、語彙的要因と韻律的要因の関係を実験心理学的な手法によって定量的に検討した結果を報告する。

3 実 験

3.1 対象言語

今回の実験では対象言語として熊本方言をとりあげる。その理由はふたつある。第一に、熊本方言は待遇表現の発達した方言であり、専ら丁寧さによって使い分けられる1音節の終助詞が複数存在する(吉岡1996)。そのため、終助詞を入れ替えることによって発話の音韻長を一定に保ったまま語彙的な要因による丁寧さを制御することができる。

第二に熊本方言は無アクセント方言であるため、韻律要素の制御にあたって発話を構成する個々の語のアクセントに配慮する必要がない。また他の無アクセント方言に比較すれば韻律構造の解明が進んでおり、自由度の高いイントネーション構造が明らかにされている。

3.2 音声素材

実験に供するテキストとして疑問詞疑問文「ドレニノボル？」を利用する。眼前に適当な枝ぶりの樹が何本もある状況で、どれに登るかを尋ねる発話である。聞き手に対して回答を要求する「問いかけ」のモダリティをもつ発話であるために、さまざまな丁寧さの水準において使用されることが想定されやすい。また前川・吉岡 (1992)、Maekawa (1994) 等の知覚実験も疑問詞疑問文を素材としているので、利用するイントネーションの自然性の高さが保証されているという利点もある。

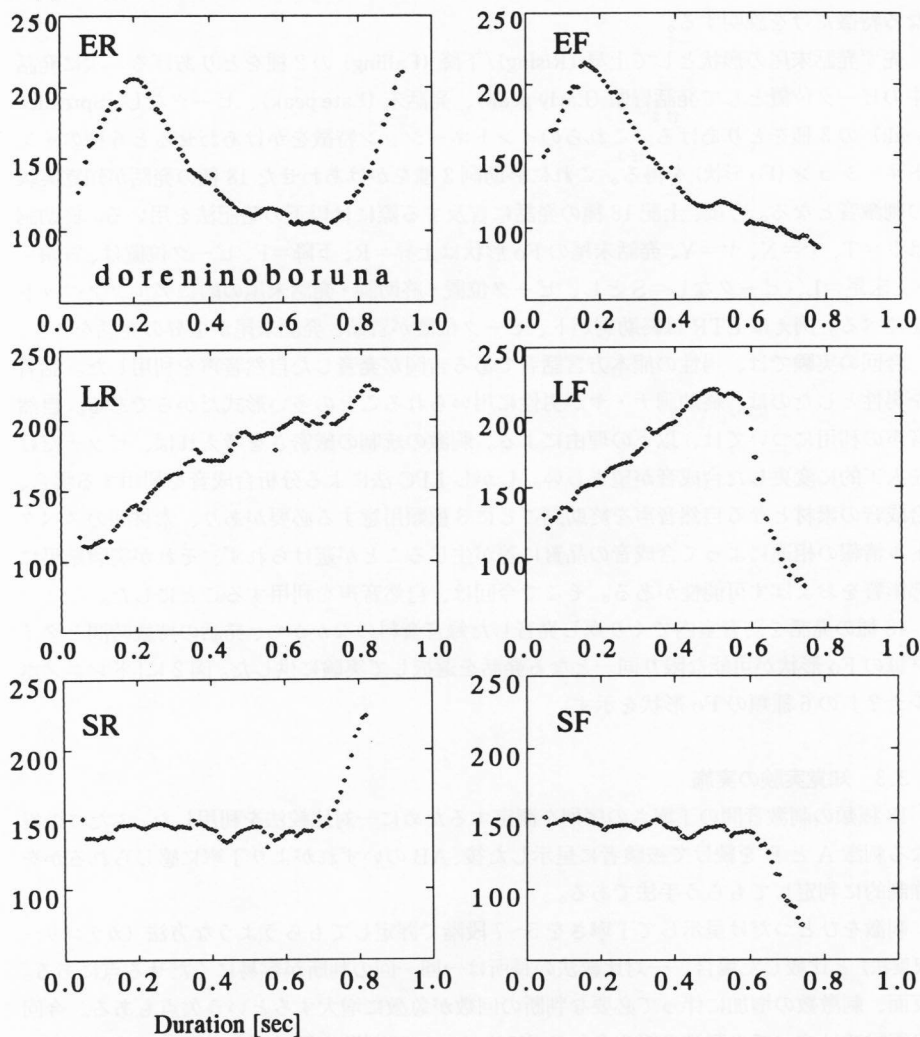


図2 知覚実験に利用した6種類のイントネーション

縦軸は音声基本周波数 (F₀)、横軸は持続時間、終助詞は「ナ」。

(16) 発話の丁寧さに対する語彙的要因と韻律的要因の寄与

語彙的要因の制御には、三種の終助詞ト・ナ・ヤを利用する。いずれも疑問詞疑問文末に使用可能であり、熊本方言話者の内省によれば丁寧さの水準に異同が認められる。これらの終助詞の言語使用には性差が認められ、トは男女ともに使用されるが、ナとヤの使用は男性に偏る傾向がある。

韻律的要因については、発話全体のイントネーションを制御する。熊本方言イントネーションの詳細については、筆者らによる一連の実験音韻論的な研究があるので参照していただきたい(前川1992、1997、前川・吉岡1992; Maekawa 1994)。ここでは、分類の基準となる特徴だけを説明する。

まず発話末尾の形状として上昇(Rising)/下降(Falling)の2種をとりあげる。次に発話中のピーク位置として発話冒頭(Early peak)、発話末(Late peak)、ピークなし(Spreaded peak)の3種をとりあげる^{注2}。これらのイントネーション特徴をかけあわせると6種のイントネーション(F₀形状)を得る^{注3}。これに終助詞3種をかけあわせた18種の発話が知覚実験の刺激音となる。今後、上記18種の発話に言及する際には以下の略記法を用いる。終助詞はト=T、ナ=N、ヤ=Y、発話末尾のF₀形状は上昇=R、下降=F、ピーク位置は、冒頭=E、末尾=L、ピークなし=Sとし、ピーク位置・終助詞・発話末尾の順にアルファベットを並べる。例えばETRは終助詞がト、ピーク位置が冒頭、発話末尾が上昇の発話をさす。

今回の実験では、男性の熊本方言話者である吉岡が発音した自然音声を利用した。話者を男性としたのは、終助詞ナ・ヤが男性に用いられることの多い形式だからである。自然音声の利用については、以下の理由による。刺激の統制の厳密さを考えれば、ピッチだけを人工的に変更した合成音が望ましい。しかしLPC法による分析合成音を利用する場合、合成音の素材となる自然音声を終助詞ごとに3種類用意する必要があり、素材間のスペクトル情報の相違によって合成音の品質に差が生じることが避けられず、それが実験結果に悪影響をおよぼす可能性がある。そこで今回は、自然音声を利用することにした。

18種の発話を防音室内でくり返し発音した録音資料のなかから、発話の持続時間とタイプ毎のF₀形状が可能な限り同一となる発話を選択して実験に供した。図2に「ドレニノボルナ?」の6種類のF₀形状を示す。

3.3 知覚実験の実施

18種類の刺激音間の丁寧さの序列を測定するために一対比較法を利用した。ふたつの異なる刺激AとBを続けて被験者に呈示した後、ABのいずれがより丁寧に感じられるかを強制的に判定してもらう手法である。

刺激をひとつだけ呈示して丁寧さを5~7段階で評定してもらうような方法(カテゴリー尺度法)と比較した場合、一対比較法の長所は一回一回の判断が容易にくだせる点にある。反面、刺激数の増加に伴って必要な判断の回数が急激に増大するという欠点もある。今回の実験ではすべての刺激の組み合わせ(153)について刺激の呈示順を逆転させて2回ずつ判断してもらい、合計306回の判断を要求した。

刺激の呈示方法は、まず0.5秒間白色ノイズを再生して短期記憶の消去をはかったのち、

ふたつの刺激を続けて再生した。その後回答用紙への記入時間として3.5秒のブランクをおいている。50対の呈示ごとに短い休憩をはさんだので、実験に要した時間は約50分であった。

実験は1996年11月と1997年1月に実施した。1回目は熊本在住の大学生22名(平均20.7歳SD0.7歳 男性4名女性18名)を、2回目は熊本出身の中年層15名(平均49.1歳SD8.6歳 男性7名女性8名)を被験者群とした。いずれの群からも実験の前後に出身地・生育歴・終助詞の使用意識に関するデータを得た。

4. 実験結果の分析

4.1 終助詞の使用意識

最初に終助詞の使用意識を分析して被験者のスクリーニングをおこなう。集計結果を表1に示す。疑問詞疑問文「ドコニク?」にこれらの助詞を使うかという質問への回答であ

表1 終助詞の使用意識

終助詞	大学生 N=22			中年層 N=15		
	使う	聞く	聞かない	使う	聞く	聞かない
ト	22	0	0	13	1	0
ヤ	7	13	2	7	7	0
ナ	2	20	0	6	8	0

る。大学生に関しては全員がトを使用する。ヤを使う者は7名と少ないが、周囲の人間が使うのを耳にする者が大多数である。ナではこの傾向が一層強まり、自分で使うものは2名だけである。ヤ・ナを使うとする回答が少ないのは被験者に女性が多いことも関係している。以下ではヤを聞かないと答えた2名を除外した20名を分析の対象とする。中年層では「聞かない」の回答はあらわれておらず、ヤ・ナの使用率も大学生より高い。全員を分析の対象とする。被験者はすべて無アクセント地域の出身である。

4.2 各要因単独での分析

終助詞およびイントネーションの選択が丁寧さどう関係するかを、まずはそれぞれ単独に分析してみよう。以下では、或る刺激が他のすべての刺激に対して丁寧さにおいて優ると判定された比率を正規化得点と呼ぶことにする。被験者1名ごとに、ひとつの刺激は他の17刺激と2回ずつ比較されるから、被験者数をNとすると全体では $17 \times 2 \times N$ 回の判定が下される。そのすべてにおいて丁寧さに「優る」と判定されればその刺激の得点は1.0となり、反対にすべてにおいて「劣る」と判定されれば得点は0.0になる。

表2に終助詞ごとに平均した正規化得点の分布を示す。終助詞の選択は平均値に顕著な変動をもたらしており、大学生においても中年層においてもト>ナ>ヤの順に平均値が下降してゆく。被験者の反応の合計点を連続変数とみなした上で、一元配置分散分析によって平均値の差を検定すると、いずれの被験者群においても高い水準での有意差が検出され

(18) 発話の丁寧さに対する語彙的要因と韻律的要因の寄与

表2 終助詞毎の平均正規化得点

終助詞	大学生 N=20	中年層 N=15
ト	.61	.63
ナ	.53	.53
ヤ	.36	.34

る (大学生 $df=2$, $F=31.0612$, $p<.0001$; 中年層 $df=2$, $F=46.4656$, $p<.0001$)。また Tukey^{注4}の方法で要素間の差を検定すると、いずれの終助詞対の間にも有意差が検出される (大学生トとナ $p<.0194$, トとヤ $p<.0001$, ナとヤ $p<.0001$; 中年層トとナ $p<.0048$, トとヤ $p<.0001$, ナとヤ $p<.0001$)。3種の終助詞の間には丁寧さの水準に関して明瞭な差が存在していることがわかる。

次に、イントネーションに関する正規化得点の分布を表3に示す。発話末のF₀特徴であ

表3 イントネーション毎の平均正規化得点

大学生 N=20			中年層 N=15				
R	.62	E	.66	R	.60	E	.62
		L	.54			L	.53
		S	.67			S	.64
F	.38	E	.37	F	.40	E	.41
		L	.49			L	.46
		S	.27			S	.33

表4 終助詞とイントネーションについての二元配置分散分析

大学生

SOURCE	SUM-OF-SQUARES	DF	MEAN-SQUARE	F-RATIO	P<
終助詞	431.80	2	215.90	16.44	0.0001
イントネーション	942.55	5	188.51	14.35	0.0001
終助詞 * イントネーション	218.70	10	21.87	1.66	0.0885
ERROR	3783.18	288	13.14		

中年層

SOURCE	SUM-OF-SQUARES	DF	MEAN-SQUARE	F-RATIO	P<
終助詞	120.75	2	60.37	8.43	0.0003
イントネーション	410.78	5	82.15	11.48	0.0001
終助詞 * イントネーション	40.02	10	4.00	0.56	0.8467
ERROR	2061.88	288	7.16		

る R と F の間には顕著な差があり、正規化得点値でみると R か F かの選択は終助詞の選択に匹敵する効果をもたらしている。一元配置分散分析の結果も高い水準での有意差を示している (大学生 $df=1$, $F=123.5798$, $p<.0001$; 中年層 $df=1$, $F=95.5527$, $p<.0001$)。

一方、ピーク位置の特徴は単純に集計すると $E=.52$; $L=.51$; $S=.51$ となり、要素間に差が認められない (有意差もない)。しかし表 4 のように発話末の特徴とクロス集計すると差が顕在化する。発話末が R の場合は E, S と L の間に差があり、発話末が F の場合は $L>E>S$ の順に平均値が下降してゆく。

4.3 総合的分析

さて、いよいよ終助詞とイントネーションの効果を総合的に分析しよう。図 3 に大学生および中年層による 18 刺激の丁寧さの判定結果を示す。グラフの縦軸は正規化得点である。この図からは表 2 に見る終助詞の序列が絶対的なものでないことがわかる。イントネーションの効果によって終助詞間の序列が逆転しているからである。例えば表 2 で最も序

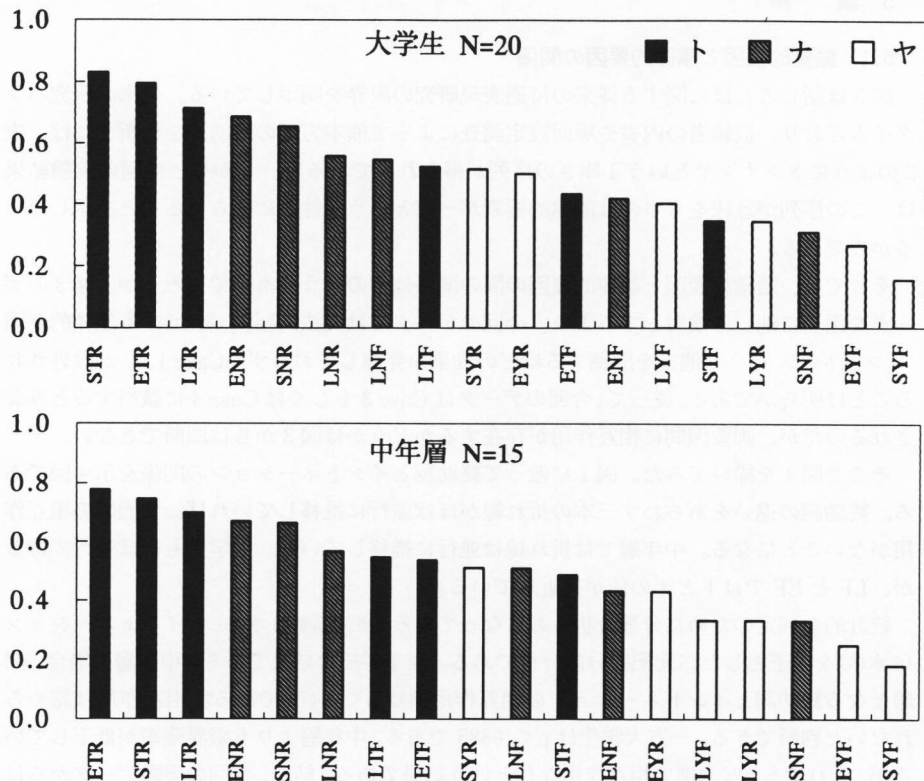


図 3 大学生および中年層の知覚実験結果

大学生 20 名 (上段) および中年層 15 名 (下段) による 18 刺激の判定結果。

縦軸は正規化得点、横軸は刺激、グラフの模様は終助詞に対応している。

列の高い終助詞であるトを含む発話は R と組み合わせられている限り (STR, ETR, LTR) 最も丁寧と判定されているが、一旦 F と組み合わせられると (LTF, ETF, STF)、R と組み合わせられたナ (ENR, SNR, LNR) よりも序列が低くなる。なかでも STF の低下は著しく、ヤの一部よりも序列が下になる。この現象はいずれの被験者群でも観察される。

他の終助詞ナ・ヤもイントネーション次第で序列が変動する。いずれの終助詞に関しても、発話末が R である刺激が終助詞を共有する刺激群の内部で相対的に上位を占め、F の刺激が下位を占める傾向を指摘できる。やはり被験者群による差は認められない。

以上、終助詞の序列に注目して分析したが、視点を変えて述べれば、表 3 に見るイントネーションの序列もまた絶対的なものでないということである。

最後に大学生と中年層の判定の異同を分析しておこう。両者間の相関は非常に高い。正規化得点を用いた積率相関係数は .955、順位値を用いた順位相関係数は .959 であり、共に $p < .001$ で有意な相関である。両被験者群の反応は本質的に均一であると考えられる。

5 議 論

5.1 語彙的要因と韻律的要因の関係

図 3 は話しことばに関する従来の待遇表現研究の限界を明示している。従来の研究パラダイムどおり、被験者の内省や場面設定調査によって熊本方言の終助詞を分析すれば、表 2 のようにト>ナ>ヤという丁寧さの序列が得られるであろう。しかし、今回の実験結果は、この序列が意味をもつのは韻律的要素が一定という条件下に限られることを示しているからである。

それでは、語彙的要因と韻律的要因の間関係はどのようなものであろうか。図 3 のデータを図 1 に則して検討してみよう。今回のデータでは文法的要因(終助詞)も韻律的要因(イントネーション)も他方を圧倒するほどの効果を発揮しておらず、Case 1、2 が除外されることは明らかである。従って、今回のデータは Case 3 もしくは Case 4 に該当するとみなされるのだが、両要因間に相互作用が存在するかどうかは図 3 からは即断できない。

そこで図 4 を描いてみた。図 1 に倣って終助詞とイントネーションの関係を示す図である。終助詞の違いをあらわす三本の折れ線がほぼ並行に推移していれば、要因間の相互作用がないことになる。中年層では折れ線は並行に推移している。大学生もほぼ並行であるが、LF と EF ではトとナの値が接近している。

統計的な判定のために分散分析もおこなってみる。終助詞 (3 水準) とイントネーション (6 水準) を因子とした二元配置分散分析である。表 4 がその結果である。中年層の場合、問題となる終助詞とイントネーションの相互作用項は $p < .8476$ である。相互作用は認められないと判断できる。一方大学生は $p < .0885$ である。中年層よりも限界確率が低下しているが、それでも 5%水準で相互作用なしという結果である。結局、今回の実験データからは語彙的要因と韻律的要因との間に相互作用が存在する証拠は見つからない。両者は基本的には独立して発話の丁寧さの知覚に寄与していると考えられる。

なお図 4 からは終助詞とイントネーションの丁寧さへの寄与の程度も読みとることがで

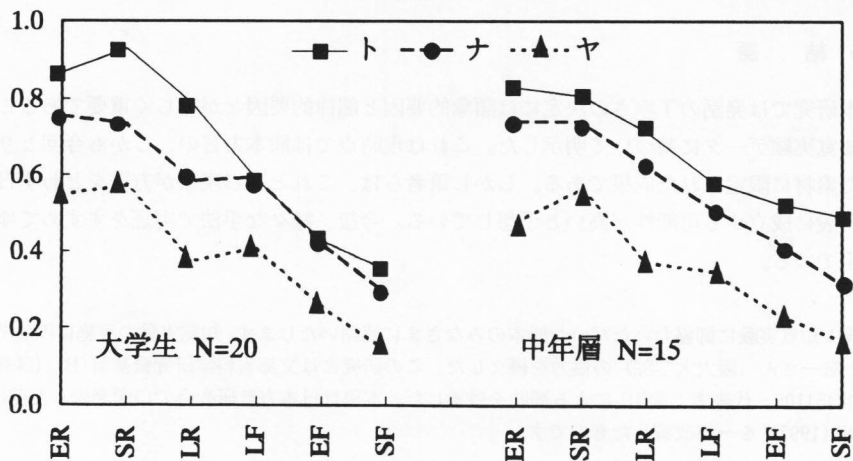


図4 終助詞とイントネーションの関係

左が大学生、右が中年層のデータ。縦軸は正規化得点、横軸はイントネーションのタイプ。

きる。中年層では両者の寄与がほぼ同程度であるが大学生ではイントネーションの寄与の方が終助詞よりも大きい。この事実は大学生が中年層よりもイントネーションに依存した待遇表現行動をおこなっている可能性を示唆している。社会言語学的に興味ぶかい現象であるが、分析は他の機会にゆずる。

5.2 残る問題：丁寧さの変種

今回の研究に関してしばしば受ける質問は、丁寧さという概念自体に関するものである。すなわち、一言に丁寧さと言ってもその内容は多種多様でないかというものである。この質問は妥当かつ重要である。筆者らも実験の構想過程で、この問題を議論したことがある。その際、丁寧さには「慇懃無礼な丁寧」「卑屈な丁寧」「親愛な丁寧」など様々な内部変種が存在することが想像された。しかし、種々の丁寧さを記述し分類する語用論上の枠組みは現在のところ提案されていない。そこで、内部変種の問題は次段階で取り組むべき重要課題とし、今はとりあえず様々な丁寧さが一次元尺度上に写像可能であると仮定した上で実験を開始することにした。

この仮定が測定に対する組織的な悪影響をあたえることがあるとして、第一に考えられるのは種々の丁寧さを一次元尺度に写像するにあたって被験者間で、あるいは同一被験者内で判断にユレが生じる可能性である。しかし今回の実験結果をみると、大学生と中年層の間に非常に高い相関が存在しており(4.3節)、組織的なユレは見出せない。むしろ均一性の高い反応が得られていると言ってよい。知覚実験の現場でも、丁寧さの変種に関する疑問が被験者の側から出されたことはなかった。これらの事実からみて上記の仮定は実験の遂行上、無理のないものであったと判断できる。

6 結 語

本研究では発話の丁寧さの決定には語彙的要因と韻律的要因とが等しく重要であることを知覚実験データに基づいて明示した。これは現時点では熊本方言の、しかも今回とりあげた素材に限定された成果である。しかし筆者らは、これと同じ現象が方言をとわず日本語一般に成立する可能性が高いと予想している。今後、様々な手法で実証をすすめてゆく予定^{注5}でいる。

謝辞：知覚実験に御協力いただいた熊本のみなさまに感謝いたします。知覚実験の実施に際しては村上敬一さん（阪大大学院）の協力を得ました。この研究には文部省科学研究費基盤(B)（課題番号 08451106 代表者：前川）による補助を得ました。本稿は日本方言研究会で口頭発表した前川・吉岡（1997）を一部改稿したものです。

注1 藤原（1978-9）はこの傾向の例外に属する研究であり、韻律要素を重視した記述がおこなわれている。しかし図1に示した根本的問題に関しては直観的な考察にとどまっている。

注2 「ピークなし」のイントネーションでは発話の冒頭から次末音節まで持続する平坦なピッチが、音声学的に中（Mid）のレベルで実現される。先行研究では、このイントネーションについて言及していない。前川（1997）——脱稿は1994——の執筆以後に存在に気付いたイントネーションである。

注3 厳密に言うとLRはupstepという音声実現規則が適用されることによって生成されるイントネーションである点で他の5種類とは異質である（Maekawa, 1994）。ただしそれが本稿の議論に影響をおよぼすことはない。

注4 一対比較法では一回の判断でふたつの刺激に対する優劣の判定が同時に下される。そのため同時に判定された刺激の間では測定の実験の独立性が保たれない。ところが分散分析では測定の実験の独立性が前提とされる。この問題を回避するために、本稿に報告する分散分析では2番目に呈示された刺激だけを分析の対象とすることにした。その場合でも、すべての刺激対の呈示順を逆転させて2回呈示しているので(3.3節)、各刺激音の呈示回数は同一であり、バランスのとれた実験となっている。

注5 前川・吉岡（1997）ではイントネーションの丁寧さの判定モデルについても述べているが、本稿では紙幅の関係で省略せざるをえなかった。別稿にまとめて公開する予定である。

参考文献

- 藤崎博也（1994）「韻律研究の諸側面とその課題」日本音響学会講演論文集 2-5-11（1994.10）
藤原与一（1978-9）『方言敬語法の研究1, 2』春陽堂
洪 珀杓（1993）「丁寧表現における日本語音声の丁寧さの研究」音声学会会報, 204, 13-30
前川喜久雄（1992）「熊本無アクセント方言のイントネーション」月刊言語, 21-9, 66-74, 大修館書店
前川喜久雄（1996 a）「言語学からみた音声の多様性」日本音響学会誌, 52-7, 552-557
前川喜久雄（1996 b）「韻律によるパラ言語情報の表出に関する準備的考察」人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD 9602, 31-36
前川喜久雄（1997）「アクセントとイントネーション：アクセントのない地域」『日本語音声 [1] 諸方言のアクセントとイントネーション』三省堂

- 前川喜久雄・吉岡泰夫 (1992) 「熊本無アクセント方言のイントネーション：イントネーションモデルの知覚実験」重点領域研究「日本語音声」国際シンポジウム予稿集, 35-42
- 前川喜久雄・吉岡泰夫 (1997) 「発話の丁寧さに関与する語彙的要因と韻律的要因の関係：熊本方言における終助詞とイントネーション」日本方言研究会第64回研究発表会発表原稿集, 67-74
- 吉岡泰夫 (1996) 『南関町史方言編』熊本県南関町
- Brown, P. & S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Maekawa, K. (1994) Intonational Structure of *Kumamoto* Japanese: A Perceptual Validation. *Proceedings ICSLP94*, Vol. 2, 119-122, Yokohama.

——まえかわきくお 国立国語研究所 言語行動研究部 第2研究室長——

——よしおかやすお 国立国語研究所 言語変化研究部 部長——

(平成9年6月18日 受理)